The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「歯と健康Ⅱ」: ORAL HEALTH for ACTIVE AGEING
Author(s)	関, 淳一; 和泉, 雄一; 米山, 武義
Citation	目で見るWHO. 2013, 51, p. 7-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

●日本 WHO 協会フォーラム開催報告

「歯と健康Ⅱ」
～ ORAL HEALTH for ACTIVE AGEING ～

世界的な高齢化進展を受けてWHOは、NCD(非感染性疾患・生活習慣病)対策、人々の日常的生活習慣の改善への意識と知識の啓発に注力すべきことを求めています。高齢化最先端の日本では、一定の健康意識の高まりが認められるものの、医科歯科の間にあって、口腔保健がともすれば忘れられがちになっています。身体的・精神的・社会的に健康な老後生活のために、口腔への関心と日常的ケアが如何に重要であるかについて再認識して頂く目的で、2013年2月27日に東京・丸の内の新国際ビルにある日本交通協会大会議場に於いて日本WHO協会フォーラム「歯と健康Ⅱ～ORAL HEALTH for ACTIVE AGEING～」を開催致しました。全国各地より、企業・健保組合・行政で健康啓発活動を担当しておられる方々を中心に110名余の皆様に参加いただきました。

日本WHO協会フォーラム　歯と健康Ⅱ
～アクティブエイジングのために～

「今、何故『歯と健康』か」
日本WHO協会理事長　関　　淳一

「口と全身の密接な関係」
東京医科歯科大学 大学院教授　和泉　雄一

「口腔ケア・口腔リハビリは高齢者の命を救う」
米山歯科クリニック院長　米山　武義氏

「実践 口腔のセルフケア」
パネルディスカッション・質疑

フォーラムは、まず、当協会理事長の関淳一より「今、何故『歯と健康』を採り上げるのか」その答えは「アクティブエイジングのために」であるとする開会挨拶を兼ねたプレゼンテーションで始まりました。そののち、東京医科歯科大学大学院の和泉雄一教授からは「口と全身の密接な関係」と題して、歯周病と糖尿病や全身疾患との関係やその仕組みについて、最新の研究を踏まえた講演がありました。続いて、日本歯科大学臨床教授、米山歯科クリニック医院の米山武義院長からは「口腔ケア・口腔リハビリは高齢者の命を救う」と題して、御自身が老人介護現場で実践された経験を踏まえて口腔ケアの重要性を指摘する講演がありました。

和泉雄一氏・米山武義氏の講演内容の詳細については、その講演録を本機関誌「目で見る　WHO」次号にて掲載させて頂く予定ですが、今回は、当日の配布資料に掲載させていただいた講演主旨を転載致します。

開会の挨拶に替えて「今、何故『歯と健康』か」

関　淳一

Junichi SEKI

昭和10年　東京都生まれ
昭和36年　大阪市立大学医学部卒業
平成15～19年　大阪市長
平成22年～　日本WHO協会 理事長

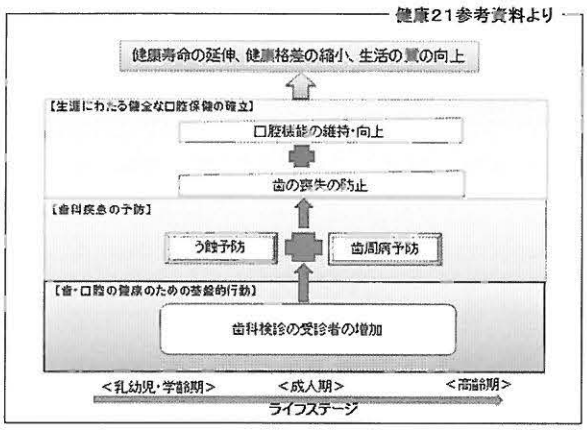
WHOの名前は小学生でも知っていますが、何をしているのかを説明できる人はわずかです。WHOといえば、アフリカでマラリアやエイズといった感染症と戦っているイメージを浮かべる人が多いのではないでしょうか。それも間違いではないですが、今やアフリカなど途上国を含めて、全世界的に高齢化が急速に進行し、NCD(非感染性疾患・生活習慣病)への対策が急務となっており、近年WHOでも最重点施策のひとつとして取り組んでいますが、そのことを知る人は多くないでしょう。

毎年4月7日WHOが誕生した記念日である世界保健デーには、その年の重点テーマが発表されますが、2012年のテーマは「高齢化と健康」であり、2013年はNCDのリスクを高める「高血圧」がテー

マとなります。高齢化について、WHOではアクティブエイジングを提唱しています。健康で生きがいをもった充実した老後のために何が大切かを考えるとき、咀嚼し嚥下して食事の栄養を取り込むだけでなく、言葉を発し、表情を作り、時にはキスをする口腔の役割は大きいものです。しかも、歯周病がNCDの重要なリスクファクターであることが近年の研究で明らかにされつつあります。口腔が身体の重要な臓器のひとつであることをこの機会に再認識し、手遅れにならないうちにケアを心がけることで、一人でも多くの方にアクティブエイジングを享受して頂きたいと思います。そのような趣旨で、本日「歯と健康」をテーマにフォーラムを開催させていただきます。

「歯・口腔の健康」の目標設定の考え方

健康21参考資料より



「口と全身の密接な関係」

和泉　雄一

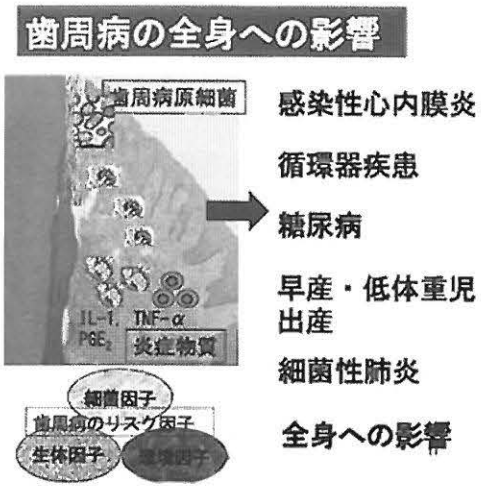
Yuichi IZUMI

昭和28年　東京都生まれ
昭和54年　東京医科歯科大歯学部卒
平成11年　鹿児島大学歯学部　教授
平成19年～　東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科歯周病学分野教授

わが国は、歴史上例を見ない早さで高齢化が進む一方、結婚や出産年齢が年々高まり、少子化も深刻化しつつあります。このように急速な少子高齢化社会の到来を迎え、健康で長生きを喜べる社会、すなわち健康長寿社会の実現が大きな課題となっています。

平成14年8月に成立した健康増進法に関する冊子「健康日本21」で、歯周病が「健康を脅かす危険な状態あるいは危険因子」として位置づけられたことで、国内において歯科医療は「歯の健康」だけに焦点を合わせるのではなく、健康寿命を延ばすための医療として捉えられるようになりました。

平成19年4月にまとめられた「新健康フロンティア戦略」では、今後国民が自ら取り組んでいくべき9つの分野の中に「歯の健康」が取り上げられ、生活習慣病と歯周病との関係や口腔の健康と全身との関係にも言及されています。さらに、平成23年8月には歯科口腔保健の推進に関する法律が公布・施行され、ますます、歯科疾患の予防や口腔の保健への関心が高まっています。



ヘルスケアにおける口腔と全身との関連性が科学的に追求され、歯周病が全身疾患に密接に関係していることが次第に明らかにされています。歯周病患者は、健康人と比較して、冠状動脈疾患、心疾患での死亡、心筋梗塞の発作をおこす危険率が上昇しています。また、糖尿病患者は、歯周病原細菌に対する易感染性により歯周病に罹患しやすく、治癒しにくいと考えられています。逆に、歯周病患者は歯周局所で炎症性因子が持続的に産生され、これらの物質がインスリンの作用を阻害するため、糖尿病に罹患しやすいと言われています。さらに、老人ホームにおいて、非口腔ケアグループは、口腔ケアグループと比べて肺炎を起こすリスクが1.67倍高いことが明らかにされています。また、妊娠過程において妊婦が重症な歯周病に罹患していると、早産や低体重児

出産の危険率が増加します。

誰もが長寿を謳歌するうえで、健康で文化的な毎日がおくれる生活の質（QOL）を高めることが重要です。その一助として、歯周病を克服することが急務と考えられます。

「口腔ケア・口腔リハビリは高齢者の命を救う」

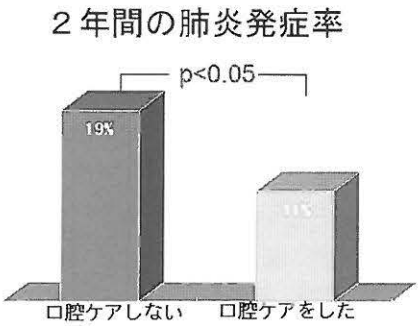
米山　武義

Takeyoshi YONEYAMA

昭和29年　静岡県生まれ
昭和54年　日本歯科大学歯学部卒
平成２年　米山歯科クリニック開業
平成23年　日本歯科大学 臨床教授

急激な高齢化がすすむわが国において、この変化に対応できない方々、とくに健康を害し、看護や介護を受けている方にとって日々の生活、将来の人生設計についての不安は計り知れないものがあります。最近の報告によりますと、これらの方々の口腔環境は非常に厳しく、深刻な問題を抱えているといわれております。そしてこの口腔環境に起因する歯周病等の感染症が全身に深刻な影響を与えていることが医学論文により明らかになっています。つまり、虚弱な方にとって口腔の感染症は生死を分ける一大事といっても過言ではありません。しかしながらこのことの重要性が医療、介護の専門職はもとより、一般国民には十分知られていません。

昔から「口は健康（病気）の入り口、魂の出口」と言われますが、特別養護老人ホームにおけるいくつかの臨床研究を行う中から、要介護者における誤嚥性肺炎の発症と口腔衛生との間に注目すべき関係があることをつかみ、口腔ケア（歯周基本治療）によって40%前後の誤嚥性肺炎予防効果が期待できることが分かりました。



そして1999年、日本老年医学会雑誌に「老人性肺炎の病態と治療」という論文が掲載され、新しい老人性肺炎予防の戦略の中に口腔ケアの重要性が示されました。さらに2002年の米国老年医学会誌に「Oral Health is Cost-Effective to Maintain but Costly to Ignore」という論文が掲載され、口腔ケアが、経済効率の上からもQOL維持のためにも医学的効果が高いという専門医の考えが伝えられました。

まさに口腔は生きる意欲を引き出す場所です。我々の願いは、口腔を通して高齢者の命を守り、納得のいく人生をお手伝いすることです。今回の講演では、「口腔ケア・口腔リハビリは高齢者の命を救う」というテーマであらためて口腔ケア（歯周基本治療）の重要性と展望についてお話したいと思います。

講演に引き続いて「実践・口腔のセルフケア」と題したパネルディスカッションと質疑応答が行われ、若い世代、働く世代、高齢世代等世代ごとに個々人が口腔保健、日常の口腔ケアのために何をすべきかについて、「あいうべ体操」など口腔機能維持のリハビリを含め、具体的実践法を明らかにするとともに、定期的な歯の健診普及や医科歯科連携推進について議論を展開、フロアーの皆様からも熱心な質問を頂き、有意義な啓発イベントとなりました。

今回のフォーラムは厚生労働省・日本医師会・日本歯科医師会のご後援とともに、サラヤ株式会社・東京サラヤ株式会社のご協賛により公益社団法人日本WHO協会が主催により開催することができました。ご協力に感謝申し上げます。